



会場風景

まちのリレー会議 vol.1 「あいだとあいだをつなぐ」レポート

ココロエー級建築士事務所
奥村 理加

開催日：平成 22 年 3 月 12 日
場所：岡山市上之町會館ホール 2F

今回が第一回目のまちのリレー会議は予想を上回る 35 人もの人が集まり、開場後すぐに満員となった。少し緊張した雰囲気ではじまった会場は、3 人のパネリストが順番に活動発表をしていくにつれ和やかな雰囲気となり、質疑が多く飛び交う盛り上がりを見せた。

まず一人目の活動発表は建築家の岡昇さん。

岡さんは高松市仏生山町で仏生山温泉を設計し、番台もしている。仏生山町は旧高松藩菩提寺の門前町として栄えたまちで江戸時代に 120 軒あった町家は現在 40 軒程になっている。現在ある仏生山の価値の上に価値を重ねることで新たなまちの価値をつくる「まちぐるみ旅館プロジェクト」を提案している。

それは、まちをひとつの旅館と捉えたもので、単体として事業をしている客室、カフェ、物販店、温泉などの機能がまちのなかに点在し、ひとつの旅館とみたてたプロジェクトだ。その中で既存店を利用してもらうために、まちぐるみ旅館内に既存店と同業種がぶつからないように異業種の店を増やすことをしている。そのプロジェクトとともに、地元の農とまちづくりをつなげる「仏生山のおいしい野菜プロジェクト」や空き家になっている町家と出店希望者をとりもつ「仏生山家守ネット」事業を立ち上げ、去年は「仏生山のおいしい野菜プロジェクト」のプレショップを行った。

今年の秋には「まちぐるみ旅館プロジェクト」を本格的に始動させ、まちの人の意識を高めていこう。10 年がかりでこのプロジェクトを進めていく計画とのこと。

仏生山で生まれ育ち、大学卒業後、東京の設計事務所で働いていた岡さんだからこそ外からみる仏生山の可能性に気づき、旅館という箱のなかにすべての機能を入れ込むところをまちに点在させた。観光客をうまくまちの中で循環させるという仕組みが素晴らしいと思った。



中央：岡さん



仏生山のおいしい野菜プロジェクト

続いて豊田雅子さん。

豊田さんは現在、「NPO 法人尾道空き家再生プロジェクト」の代表をしている。尾道市は駅から 2km 圏内に 500 軒もの空き家が存在している。それは坂のまちで道が狭く、車が入らないところが多く、少子高齢化で尾道の顔である部分をどうにかできないかとプロジェクトを立ち上げ、現存する古い家（空き家）を再生して次の世代に残していく取り組みを行っている。昨年 10 月より尾道市から「尾道市空き家バンク」を委託され、定住促進をし、その一環として空き家を見て回る「空き家めぐりツアー」や専門家や先住者のアドバイスを無料で受けれる「一日空き家なんでも相談会」の開催を行い、定住までの支援としてボランティアの手でゴミの搬出、空き家から出る不用品の蚤の市の開催、再生資材の搬入も行っている。現在、「尾道市空き家バンク」に登録している空き家の物件数は 58 軒でこの 3 ヶ月で 8 件が成立した。毎月、50～60 件の問い合わせがあり、物件情報の閲覧者は 20 件もある。尾道駅周辺の空き家が 500 軒のうち、登録されている空き家が 58 軒なので今後は大家を探しだし、登録物件を増やし、実際の再生を進めていきたいとのこと。

現在の主な問題点として、法人の資金不足、地域の雇用問題があり、定住促進を継続していくには岡さんが話されていた「まちぐるみ旅館プロジェクト」の全体的なビジョンを指すように地域に足りない要素を入れることで持続していけるのではないかなと思う。



左：豊田さん



資材の搬入

最後に柏戸喜貴さん。

柏戸さんは、岡山県出石町にある「アートスペース油亀」の代表、アートで出石のまちを塗り替えるまちづくりアートプロジェクト「出石芸術百貨街」の企画を担当しており、アーティストの展覧会の企画、マネジメントを行っている。最近では、まちとアートの関わり方の方法として、展覧会をパブリックスペースで開催している。

昨年、長崎にある興福寺で行った展覧会では作家と地元の人との対話の場を設けたところ、作品のおもしろさに気づき、地元の人に作品を紹介するようになった。先月には岡山駅、福山駅で展覧会を開催し、作家と出石町の人や学生とが関わり、一緒に作業を経験することでアートを身近に感じてもらい、作家が地域の場所性を汲みとることでそこにしかない作品をつくりあげている。この展覧会は駅で開催され、老若男女問わず浮浪者から会社帰りのサラリーマンまでが立ち寄り、大盛況に終わったとのこと。

展覧会をギャラリーで開催するだけでなく、公共空間で展示することでふだんアートに接することのない人も容易に触れることができ、地域の人が作家との対話やサポートを行うなど地域とのつながりを生む仕組みが興味深いと思う。



右：柏戸さん



スサイタカコ展（岡山駅）

■会場から挙げた代表的な質疑

Q：「仏生山のおいしい野菜プロジェクト」のプレショップを行うことで「まちぐるみ旅館プロジェクト」にどんな影響が出たか？

A：まちの人に対して、現在計画中である「まちぐるみ旅館プロジェクト」への本気度が伝わった。（岡さん）

Q：尾道をどんなまちにしたいか？

A：地域の人に地域資源を再発見してもらい、古いものを生かしながら次の世代に残していくようなまちにしたい。（豊田さん）

Q：まちとアートの関わり方でアーティストが作品として地域の意味をどう解釈してそれを作品に落とし込んでいっているのか？

A：ケースによるがアーティストの多くには場所が決まってから作品をつくるようにしてもらっている。場所がもっているものを吸収し、地域の人と会話することで場所性を作品に落とし込んでいっている。（柏戸さん）

東京工業大学の真野准教授より、3 人のパネリストたちには構想力があり、実績もあるがそのビジョンにすべての人がついていけないわけではない。自分のこととしてプロジェクトに絡んでいきたいと思わせるには岡さんのように事業として地域の人が入れる仕組みがあることや柏戸さんのように外にでて地域の人と一緒に作業をすることで賛同者を増やすことができるのではないか。豊田さんの「空き家再生プロジェクト」の場合は空き家を媒介として住人が力になることができた。ただし、事業性がないと持続させる部分が弱いとの意見をいただいた。

まちのリレー会議を終えて、3 人の活動の共通点は地域と人をつなげる取り組みをし、地域にある場や空間をよみがえらせている。また、それを楽しみながら行っている点だと思う。共通の課題としては、地域の意識の低い人に対して地域を再発見させ、意識を高めていかなければと思う。また、仏生山と尾道は空き家の活用の問題を抱えているが、それぞれの問題点は違い、仏生山は歴史ある街並みという意識が地域住民にあるので空き家を取り壊すことはないのに対し、尾道の斜面地はいろいろな年代の建物が点在するため景観の意識が薄く、空き家の所有者も各地に点在していることも理由で古い建物が取り壊されたり、以前の面影なく改修されるなど、単に空き家といってもその地域の文化や風土の違いがあるので再生方法もそれぞれの地域に応じたものでなければいけないと思った。

さまざまな地域で活動している方々がこのイベントに参加され、パネリストの活動や参加者との意義深い意見交換ができたのではないかなと思う。また、参加者は建築設計関係の仕事をしている方が多かったが学生の方や旅の途中でチラシをみて飛び込みで参加された方、県庁の職員の方など、まちづくりに関心のある若者や熱意のある人が多く、会場の熱気を共有し、まちづくりへのモチベーションも高まったのではないだろうか。第 1 回目のまちのリレー会議はまず「まちの取り組みに関心のある人」をつなげる会となったように思う。第 1 回目のまちのリレー会議をきっかけとし、ここでつながった人や地域がさまざまな取り組みを展開できるようになればと思う。